

あたしは魔法使い

Yoriko & Syauei

春日部こみと

Komito Kasukabe



エタニティ文庫

目次

あたしは魔法使い

5

アタシと魔法使い

289

書き下ろし番外編 オムライス

321

あたしは魔法使い

お姫様なんかじゃ、絶対ないの。

だって世の中ってホント不公平。不条理極まりない。

お姫様はお姫様ってだけで、この世の全てを味方につける。

でもそれってすごいズルくない？

なんの努力もしてないくせに、持って生まれたギフトを振りかざして、魔法使いの魔法まで借りて王子様をゲットするなんて、世の中舐め過ぎてる！

あたしはお姫様じゃない。

素直じゃないし、化粧を落とせば十人並み。特筆するものなんか何一つ持ってないあたしが、どうしてお姫様になんてなれる？

わかってる。あたしはお姫様になれない。

だから、魔法使いになったの。

魔法使いなら自分にだって魔法をかけ放題。

誰も味方になってくれないから、あたし自身があたしの最大の味方。自分の力で幸運も王子様もゲットしてみせる！

アイシャドウは控えめだけど華やかなピーチブラウン。

マスカラは断然クリニーク！ チークはラデュレの桜色。つやぶるなりップはディ

オールのリップマキシマイザー。

ジルスチュアートのノースリーブのワンピースは、上品かつセクシーでしょ？

魔法をかけるの。表情で、メイクで、お洋服で。

お砂糖みたいな甘さと、ジュエリーみたいな輝きで、あなたを虜にするのよ。

だから、ね？ あたしに夢中になって。

あたしは魔法使い。

いつだって、上目遣い。

かけられてよ、あたしの魔法に。

囚われてよ、あたしの罠に。

甘くとろけて、陥落して。

とっておきの呪文を囁くから。

「あなたが好きよ」

1 袖振り合うも、最初の縁

『冴えない灰かぶり』

灰をかぶって薄汚れても、魔法使いなんて現れない。醜い灰かぶりのまんま。

そのうえ、不器用で何をやらせても上手くこなせない、真面目だけが取り柄のつまらない地味な女。

それが中林依子の自己評価だった。

そして他者評価だってその通りだったりする。もしかしたら、もっと低いのかもれない。

その証拠に、さつき三年付き合った彼氏にフラれた。

「ごめんな。他に好きな子ができたんだ。……ホラ、俺ら、最近噛み合わなかったじゃん？ なんかもう潮時しおどきかなあつて」

久しぶりに呼び出されて訪れたカフェ。彼が待っていたのは、なぜか店内の席ではな

く、テラス席だった。まだ残暑が厳しいというのに、テラス席を選ぶなんていつもの彼らしくないと、不思議に思った。

だけど彼の言葉を聞いた瞬間、理解した。

別れ話をするから、ここで待っていたんだ。

テラス席なら暑くて長居できないし、他の人に話を聞かれる心配もない。

——噛み合わなかった、って何。

彼とは大学の時からの付き合いだった。

卒業後、共に就職し、お互い新しい生活に慣れるまでは距離を置こうって言ったのは、そっちでしょう？

だから会いたくても我慢した。

電話をしても『疲れてるんだ』なんてそっけなく言われたから、必要のある時以外はかけないようにした。

噛み合わなかったんじゃない。

噛み合わせようとしなくなっただけのは、そっちなのに。

「し、潮時しおどきって……。雄二おに……」

言いたいことは山ほどあったのに、悔くやしいかな、やっと出てきたのは、みっともなく震えた言葉だけだった。

「……だって俺という時……お前、自分の外見に構わないだろう？　そういうの、女としてどうなのって思うんだよね、正直」

「——外見……」

依子は自分の姿を見る。

レースをあしらった白いチュニックに、七分丈のデニム。センスが悪いとは思わないが、それらは確かに流行のアイテムとは言えない。無難な恰好というのが正しい。

けれど、そんな風に言われる程、外見に構っていなかっただろうか？

今日だって久し振りのデートだから、無難とはいえ、それなりに整えてきたつもりだ。化粧だってちゃんとしてる。

なのに、彼はそれを「どうなの？」と問う。……いや、問うているのではない。断罪しているのだ。

——お前では駄目だ、と。

黙りこくった依子に、大袈裟なため息を吐いて彼は席を立った。

「熟年夫婦じゃあるまいし、恥じらいを捨てたら終わりだろう？　——じゃ、そういうことで」

三年だ。

三年付き合った。

苦しいもしたけれど、楽しいことも嬉しいこともあって、幸せだった。なのにそんなキラキラした時間などまるでなかったかのように、彼は依子との三年間をぶつとりと断ち切って去って行った。

——こんな、ものか。こんなものだったのか。

呆然と座り続ける依子の前で、アイスコーヒーの大きな氷が、カラン、と音を立てて崩れ、黒い液体に沈んだ。

涙は出なかった。

依子は汗をかいたグラスを手に取り、勢い良く飲み始めた。まるでビールのCMのようにゴクゴクと喉が鳴る。その音が妙に心地良い。

ズズッと上品とは言えない音が出て、依子はようやくストローから唇を離した。

一気飲みの爽快感だろうか？

なんでか、晴れ晴れしい。

——あれ？　ちょっと待って。それじゃ、あたしって雄二のこと……

「——バツカじゃないの？」

それは彼に対する罵倒ではない。

自分自身に対してだった。

なぜなら、今あるのは解放感。

久しぶりに会えるのを楽しみにしていたから、あまりに唐突に訪れたこの結末に対して、哀しい、悔しいといった負の感情だつてもちろんある。それでも、これからの時間を、自分の好きなように使えると思つたら、なんだかワクワクしてきてしまったのだ。

——うわー、それって、雄二ばかり責められないでしょ。

『こんなもの』

それは彼の依子への想いの評価ではなく、自分自身への評価だ。自分の彼に対する想いは、しょせんこんなものだった。

——そりゃ、三年付き合つたところでフラれもするわ。

自分がその程度の想いしか、彼に向けていなかったのだから。

外見を磨こうとは思わなかった。

それは傍に居るのが当たり前になつていたのもあるだろうが、外見を変えてまで彼の想いを繋ぎ止めておきたいと思えなかったから。彼に執着できなかったからだ。

よくよく考えれば、これは彼が悪い訳ではない。依子自身の問題だ。

依子は恋人に夢中になつたことがない。彼との付き合いも、向こうから告白され、流されるように交際に至つた。

好きだと言われて、自分も好きだと思ひ込んだのだ。

彼との間にはいつもパーソナルスペースを置いていて、一定の距離を保ち続けていた。

それでいいと思つていたのだ。

だが、そのスペースの分だけ彼とは繋がりがきれていなくて、いつの間にかその部分に他の女性が入り込んでいた。

そのスペースは依子が踏み込ませなかった、近付こうとしなかったエゴイステイックな空間、ともいえる。

彼が他の女性を選ぶのは、当たり前だ。

自分がそれだけ、彼に対して真摯でなかったのだから。

——情けないなあ。

二十三にもなつて、恋人と向き合うことすらできないなんて。

依子はコーヒーのグラスについた水滴を親指で拭いながら、ため息を吐いた。

恋人にフラれたのに、泣けもしない。

これでいいはずがない。

「今頃気づくなんて……」

ふと店内に目をやると、エアコンの効いた室内でコーヒーを楽しんでいる客達は、ずいぶんゆったりと時を過ごしているように感じられた。炎天下、男に置き去りにされている自分とは住む世界が違つて見える。

——エアコンが何だ！ あたしはこの過酷な環境に、真っ向からこの身一つで立ち向

かつてんのよ!!

全く意味不明な八つ当たりをして目を眇めると、店内にいる一人の男性と目が合った。彼は日本人離れした目の覚めるようなイケメンだったが、こちらを見て明らかに笑いを堪えていた。

——ちよ、しっつれいな!!

フラれたところを見ていたのだろうか？

依子は憤然と立ち上がってカフェをあとにした。

久しぶりのデートのはずだったビューティフルサンデーが、一転してお気楽ホリデーへと変わってしまった。さてこれから何をしよう。

通りすがりのいけすかないイケメンに玉碎現場を見られたこと。それが単なる偶然か運命かは、現段階では神のみぞ知るところなのであった。

2 猫を飼う

「猫を飼おうと思うのよね」

彼氏にフラれて六日目の土曜日、依子は親友の京香に言った。

京香は食後の一服と言って、細い煙草に火を点けている最中だったが、その手を止めて顔をしかめた。

「はあ!? ちょっと、やめなさいよ!」

「え? なんで? 猫、前から飼いたいと思ってたんだよね。ロシアンブルーとか、アメリカンショートヘアとか。雄二が猫嫌いだったから、諦めてただけど」

雄二は猫アレルギーだった。猫の毛を吸うと鼻水とくしゃみが始まらなくなるらしく、一度訊ねてみた時に猛反対されたのだ。しかし、もう気兼ねする必要はなくなった。

大好きな猫を飼って何が悪い。幼い頃からの夢だったのだ。

京香の反対の理由がわからず、依子はきよとんとして目を瞬く。

あどけなく小首を傾げる依子に、京香は「はああああ」と盛大にため息をつく。カチリと金属音が鳴り、ピンクゴールドの細長いライターが青い炎を突き出し、今度こそ煙草に火が点いた。

依子を呆れたように見つめ、京香は煙草の煙を細く吐き出す。

「あのね、依子。男にフラれた二十三の一人暮らしの女が猫なんか飼っちゃ、干物女ですって言うてるようなもんなのよ!」

「なんでよ。そりゃ偏見つてもんでしようが」

何で猫飼ってたら干物女なんだ。全国の猫愛好家の独身女子に謝れ!

「他の誰がどうであれ、あなたは干物女になるに決まってる。それにあなたは今男にフラれたばっかなんだから、失恋の痛手を負ってなきやいけない訳、普通は」

「ちよ、普通は、ってどういうこと」

「傷心中の女が、アンチヨビたつぷりのピザとニンニクがつつりのパスタを人の分までかつくらうかつてのよ、この胃下垂いかすいが！」

「京香がもういらなくなって言ったんじゃない！ もつたないでしょ！」

「うっさいわね！ 食べても贅肉にならないとか、羨ましいのよ！ よこしなさいよその体質!!」

噛みつくように言う京香は、実は高校時代まで、百六十センチの身長に体重が七十キロもあった。だが大学進学で上京したのをきっかけに始めたダイエットに成功し、卒業した今でも四十八キロのスレンダーボディを維持しているのだ。依子にとっては、太っている京香も痩せている京香も、どちらもかけがえのない幼馴染だが、京香の周囲の対応は一変したらしい。

そんな事情があるため、京香の食べる量はビツクリするくらい少ないのだ。

「とにかく、猫なんか飼っちゃったら、あなた絶対この先彼氏なんかできないわよ！」

「だから何だよ！」

「あのね、あなたは『おひとり様』なの！」

「おひとりさま?」

「一人でも平気な人のこと。一人の時間が好きで、一人でいることが苦にならない。あなたはおひとり様を満喫できちゃう女なんだから、猫なんか飼っちゃダメなの！ だって、あなた彼氏と別れたって全然平気そうじゃないの！」

「ぬ……」

凶星を指されて、言葉に詰まる。

依子は恋人にフラれた。だがその時一番何がこたえたかと言えば、『恋人にフラれても平気な自分』に、だ。恋人であった人との別れを惜しむ感情すら持ち合わせていなかった自分の未熟さに気づかされ、情けなくなつた。

思えば、依子が雄二に会いたくなつたのは、仕事でミスをしたり上司に叱られたりした時だった。それ以外の時——すなわち仕事が順調で何の問題もない場合は、雄二を思い出しもしなかった。つまり、自分が構ってほしい時だけ傍にいて欲しい、そんな手前勝手な関係を求めてしまっていたのだ。

これでは、別れを切り出されて当たり前だ。

あまりにも雄二を馬鹿にしている。

あの時、あの暑いテラス席で、そう気づいたのだ。

『——バツカじゃないの』

あれは自分自身への嘲笑。ちやうしやう

愛想を尽かされて当然。相手に連絡を控えようと言われたから従った、なんて彼を尊重しているフリをして、自分のことしか頭になかった。恋だと思っていたあの三年間は、子供の恋愛ごっこでしかなかったんだ。

そう気づいたから、自分は恋愛なんかしないと決めた。

少なくとも、本当に好きだと思える相手が現れるまでは。

そう決心したものの、やはり温もりが恋しくもなったりする。

だから、猫、なのだ。

「お、おひとり様と猫と猫とどう関係あるのよ!」

悔くやしまぎれにそう叫んでみたが、京香の猛攻を食らう。

「あんたホント馬鹿ね! あんたみたいなおひとり様が猫なんか飼ってごらん! 猫の温もりに満足して、男なんか必要なくなっちゃうんだから! いい、依子? 猫はあつ

たかくても、セックスはしちゃくれないわよ!」

「ちよ、なんつーことをでかい声で!! やめてよ恥ずかしい!!」

「セックス程度の単語に何ビビってんの、あんたいくつよ!」

「だーもー!! わかったから!! とにかく黙んなさいよ!」

おひとり様のどこが悪い! と反撃しようと思ったが、これ以上京香を興奮させると

恥をかくのは自分だ。

依子は勝負を放棄し、京香の口を塞ふさぐことに徹したのだった。

* * *

京香にはああ言われたが、猫を飼う気持ちは変わらなかった。

仕事から帰宅して、あのもふもふした温もりが自分を待っていてくれたら、どんなに癒いされるだろう。そう思うだけで、二へ二へとやけてしまう。

京香と別れた後、依子は大型シヨッピングセンターの中のペットシヨップを訪れていた。ガラスの向こうに、さまざまな種類の犬や猫たちがいる。どれもまだ産まれたばかりの仔犬や仔猫だ。オモチャにじゃれついたり、すうすうと寝息を立てていても愛くるしい。

「かわいいー!!!」

一人だというのに、思わず声が出る。

かわいい、かわいい。もうかわいい。

何このもふもふ。

何このつぶらなおめめ。

何このにくきゅう。

ヤバイ。鼻血噴くかも。

「……やっぱ猫だわ」

見ているだけで癒される……この幸福感は何だろう？

うっとりとして一つのケージを眺めながら、依子は自分だけのカワイコちゃんになるべく産まれてきた一匹を探し始める。その中で、「際小さい灰色の仔猫と目が合い、思わず身を乗り出す。「生後ひと月、雄」と書かれたタグプレートには、「シャルトリュー」という耳慣れない種類の名前が書かれている。

「へえ、君、フランス出身なのかー」

説明書きを読みながら、依子は透明のガラスをつんつんと指でつついた。すると依子の指に合わせて、中の仔猫がそこをカシカシと引つ掻く。

「——っ、ちよ、おま……っ！」

あまりの愛らしさに悶絶しそうになり、出てもいない鼻血を抑えるように鼻を摘まんだ。その時、仰け反り過ぎて背後に立っていた人におつかってしまい、慌てて振り向いて謝った。

「す、すいません！」

ずいぶん背が高いその人は、意外なことに女性だった。

依子は彼女の美しさに一瞬ポカンと見惚れた。絵に描いたような美女。

まるで外国人モデルのようだった。

ふわりと匂い立つトワレは、エルメスのアンブル・ナルギレ。女性的でありながら、くゆらせた紫煙のような男性っぽさを感じさせる香りだ。フルーティーなお香に似た匂い。そして『異国情緒あふれる水煙草の香り』と雑誌に書いてあったのを思い出す。

ああ、この人にピツタリだなあ、と依子は思った。

見た目はとても女性的なのに、どこか荒々しさを感じる。彼女の醸し出す雰囲気はユニセックスだ。

そんな風に不躰に観察していると、彼女がぼつりと漏らした。

「いいな、猫は……。猫じゃらし追っかけたり寝たり、自由だ……」

——え。ひつく!!

美女の声が予想よりもずっと低くて驚いた。

声だけを聞くと男性かと思うほどだ。しかしこの見上げるような長身を見れば、失礼だけれども、そんなもんか、と納得してしまう。背の大きい人は、男女問わず声が低い傾向にある。

それよりも気になったのは、彼女の眩きだ。

猫を羨むその眩きに心の脆さを感じて、依子は思わずまじまじと美女の顔を見た。

こんなにも外見に恵まれた人がどうして、というのが正直な感想だ。

「……お姉さんも、自由だと思えますよ?」

気がつけばポロリと言葉が転がり出ていた。思ったことがすぐ口に出る、依子の悪い癖だ。

「……なんですって?」

美女は突然話しかけられたことに驚く様子もなく、顔だけをこちらに動かして怪訝そうに依子を見ている。

——あ、しまった。気に障ることを言ってしまっただろうか。
焦ったところで覆水盆に返らず。

依子はこうなったら、と破れかぶれになって説明をした。

「あ、いや、ごめんなさい。だってすごい美人だし、仕草も堂に入ってるし、服も自分に何が似合うかわかっている感じ。アイデンティティが確立してるように見えます。それって自由ってことだと思うんですけど」

依子からすれば、自分に似合うものを知っているこの美女は、人生を謳歌しているように見えた。だから羨ましくなってしまうのだ。しかし他人のことを勝手に解釈して、ペラペラと話すのは良くない。京香はそこを直せと言うが、彼——もう元彼だ——は潔くて気持ちが良いと褒めてくれた。今思えば、他人への思いやりに欠ける、と言いかえ

られるのかもしれないが。

だって結果、元彼とは破局した訳だから。

この人にもとんでもない失礼をしましたと、と猛烈に反省し、九十度のお辞儀をしようとして向き直った瞬間、美女が口を開いた。

「……アンタ……」

「あ、や、すみません、見ず知らずの人に！失礼でしたよね！」

あわあわと謝罪すると、美女は少し戸惑ったような笑みを見せた。

あ、怒ってないのかな、と依子はホッと胸を撫で下ろし、につこりと笑みを返した。すると美女がこれまた、食い入るようにこちらを凝視してくる。

——え、なんか付いてますか、顔に。

「……いいのよ。アンタ、名前は?」

「え? あ、依子です。中林依子」

「そう、依子、ね。……依子」

美女はまるで味わうように依子の名前を呼んだ。

——え、いきなり呼び捨てですか……そうですか……。いや別にいいですけど。

「……依子」

「ハイ?」

「依子」

「……ハイ」

何だこのやり取り。

少タイラツとしながらも、失礼をブツこいてしまった手前、依子は辛抱強くその妙な時間に耐えた。

すると、美女は胡乱うろたな目を向けていただろう依子に、いきなり大輪の花が咲いたようににっこりと微笑んだ。

クレオパトラもかくや、という極上の美女の、極上の微笑み。

同性であるにもかかわらず心臓を射抜かれるほどの威力があった。衝撃に固まる依子に、美女は小首を傾げる。

「猫を飼うの？ 依子」

「……え？ ぬ、ぬこ!? じゃない！ ネコ!？」

「猫を見てたんじゃないの？」

「ハ、ハイ！ 猫ね！ 見えましたとも！ ええ、そうです！ 飼おうと思って！ こ、この仔、めっちゃ可愛くて、飼いたいです！ 飼います！」

みょうちきりんな言い回しになってしまった。

女性相手に何を真っ赤になって動揺しているんだ、と自分で突っ込みたくなるほど

だったが、美女は何とも温かい……いや、熱っぽい？ 眼差しで見守ってくださっている。

大声で「飼います！」と叫んだせいか、黄色いエプロンをつけた男性店員が声をかけた。

「せっかくですから、抱いてみませんか？」

飼います、と言ったのは依子なのに、美女に訊ねるのはどうしてだろうか。……考えなくともわかるけど。

美女がちらりと依子を見てから、「そうね、お願いするわ」と頷くと、店員はいそいそと鍵を取り出してケージを開け、中にいる仔猫をそっと抱き上げた。

当然のごとく仔猫は美女に差し出された訳だが、美女は大きな手で仔猫を受け取ると、依子に手渡そうとした。

「はい、依子」

「え?。」

「抱っこしてみたいでしょう?」

「あ、ハイ！」

腕の中に、ぼとり、と落とされた、小さくて柔らかな温もり。

にゃ、と毛糸玉のようなその仔が鳴いた。ずきゅん、とハートを打ち抜かれる。

「飼います!!」

即決だった。もう駄目だ。この仔こが欲しい。

よく考えなければならぬことだとわかっていても、この仔こが欲しいと思ったら欲しいのだ。店員は嬉しそうに笑って「では、手続きの書類を持ってまいりますね」と奥へ引っ込んだ。美女はといえ、仔猫を抱きしめて恍惚くわつとしている依子よこを、腕を組んで見つめている。何やら彼女のまとう雰囲気けんきが剣呑けんおんなものになっているのだが、仔猫に夢中の依子は気がつかない。

「ねえ、依子」

「何ですか？」

「アンタ、その猫飼うって言うけど、準備は整えてるの？ どう見ても衝動的に言うてるようにしか見えないんだけど」

え？ 準備？

そう言われてハツとした。

生き物を飼うのだから、色々準備が必要に決まっている。

「あーえと、あたしはどうすればいいんでしょうか？」

「……呆れた。何も用意せずに猫を飼う気だったの？」

「はあ。動物を飼ったことがないもので」

依子の家は母子家庭だ。総合病院に看護師として勤める母は夜勤だ何だと多忙で、動

物を飼う余裕なんかなかった。

「まさかとは思うけど、家、賃貸じゃないでしょうね？」

「え。賃貸のワンルームですけど……」

美女が長い指で自分のこめかみを押さえる。

「……アンタ、そこペット可なんでしょうね？」

「……あ!!」

依子はすつと青ざめた。

「ペット不可だ!!」

「……………馬鹿なの？」

心底呆れたような美女の呟ささやきに、依子は大きく頷いた。

「確かに、馬鹿ですね。じゃあまずは家探した!!」

具体的な目標を見つけ、依子は俄然がぜんやる気が出てきた。

——自分を変えたい。

——けれど、どんな風に？

わからないなら、とりあえずやれることをやればいい。

立ち止まっているのは性しょうに合わない。苦しくても走り続けている方が、自分には合っている。

あの仔猫を飼いたい。それなら、家を探さないと！
単純だけど、それでいい。目の前のことに精一杯取り組むのみだ。
なりたいたい自分に近づくために。

京香に知られたら、また小言を言われるだろうな、と内心でペロリと舌を出す。

まるで計画性のない依子の言葉に、目の前の美女はなぜかウンウンと首を縦に振る。

「……………そういうことに、なるわね。……………そうね!!」

「え、そ、そうですか?」

「そうよ! この仔のために、引越さない!」

「……………は、はあ」

「ホラ、ボヤボヤしてたらこの仔が売れちゃうわよ! さっさとお家に帰ってネットで不動産情報を検索しなさい!」

そう言うと、美女は仔猫を依子の腕の中からすくい取り、ポケットから銀色のスマホを出した。

「この仔は、ちゃんと予約しといてあげるから! アンタの電話番号教えなさい!」

「え? は、はあ……………」

依子は強引に自分のスマホを奪われ、赤外線通信で連絡先を交換させられた。

「さあ、行った行った! 善は急げよ!」

文字通り追い立てられながら、依子はペットシヨップを後にした。

なぜ初対面の人に指図されているのだろう、と首を捻りながらも、あの仔猫の温もりを思い出して決意を新たにすする。

——前に進むの。

——たとえ回り道だったとしても、これがあたしのやり方だから。

『不器用で馬鹿正直』

親友にはよくそう言うてからかわれるけど、直せないのだ。

「馬鹿だからねえ」

そんな自分が嫌いじゃない。

自分を肯定できる能天気さは、いつだって大事だと思うから。

3 ルームシェア

さて新しい住処を探すといっても…………

依子は自宅のパソコンの前で「うーん…………」と唸りながら腕を組む。

まだめばしい物件は見つかっていない。

大学卒業後、すぐに今の会社に入社した訳だけど、まだ一年しか経っていない。自分で稼ぎ出して間もない依子の貯金は高が知れている。

大学時代から住んでいるこのアパートは、立地は良いが非常に古いため、身の丈にあった家賃で借りられていた。通勤にも便利だから、なるべくこの周辺で探したい。できれば今の家賃くらいで。そのうえ、ベット可となると、もうハッキリ言って該当する物件は皆無だ。

あの押し強い不思議な美女との遭遇後、言われたとおりにネットで探したけれど、見つからなかった。その後情報誌を見たり、不動産屋巡りをしてみたものの、一週間経った今でも「コレ！」と思える物件がない。

家賃設定をもう少し上げれば、理想的な部屋がない訳ではない。

けれど大学の授業料を貸与制の奨学金でまかなっていたので、その返済のため、余分な出費はできないのだ。

「困ったなあー」

はあ、とため息を吐いたら、それに合わせるように、ぐううう、とお腹の虫が鳴った。時計を見ればすでに十九時を回っている。

何か食べようと思つて冷蔵庫を開けてみたが、そこにあつたのは干からびたチーズと賞味期限の切れた卵だけだった。

「ぬうう……。弁当、買いに行くか……」

冷蔵庫を覗んでいても、食料は湧いてこない。

依子は諦めて、財布を片手に近くのスーパーへ向かった。

と言つても、依子がスーパーで見るのは酒のコーナーと、惣菜のコーナーだけ。

自慢じゃないが、料理が全くできないのだ。

母子家庭のくせに、と思われるだろうが、これはもはや能力の欠如としか言いようがない。母は父が亡くなった後、女手一つで依子を育て上げた。それは厳しい教育で、掃除から洗濯、アイロンがけまで徹底的に仕込まれた。ハウスキーパー並みにできると言つても過言ではない。

だが料理だけは、あの厳しい母に「もう、あんたはしなくていいわ……」と言われてしまうほど、壊滅的に下手だった。

料理ができない人間は、出来合いの弁当や惣菜を買うしかない。

今日も依子はお弁当コーナーをしょんぼりと物色する。出来合いのものももう飽きた。かと言つてそんなにしょつちゅう外食する余裕はない。

「ああ、お母さんの大根の煮物が食べたい……」

そんな甘ったれた独り言を呟きつつ、おにぎりと二十パーセント引きになっている茄子の味噌炒め、そしてトマトのサラダをカゴに入れた。

レジで精算を済ませ、エコバッグにそれらを入れてみると、ふと一枚の貼り紙が目に入った。

『家賃折半三万五千円！同居者求む！』

「——同居者……」

目からウロコ、だった。

そうか、同居！ ルームシェア！

それならば家賃は半分で済む！！

依子は鼻息荒く、そのチラシに近寄った。

よくよく読めば、住所はこの付近で、敷金礼金不要、そしてペットも可だという。なのに家賃は今よりもずっと安い。

まさに夢の物件！

これはチャンスだ！

依子はそのチラシを引つpegすと、エコバッグを担いで家路を急いだ。

家に着くと、すぐさまチラシに書かれている携帯番号に電話をかけた。通話ボタンを押すと、なぜか自分の携帯に『五崎正栄』という文字が現れて、依子は首を傾げた。

——ん？アレ？ こんな人登録したっけか？

オカシイな、と思つた瞬間、電話の向こうから穏やかな声が聞こえた。

『ハイ。ゴザキです』

「——あつ！ すみません、同居者募集のチラシを見て連絡させていただきましたのですが！」

『——ふふ』

電話の向こうで堪え切れないというような笑い声が出た。

「——え？」

何かおかしいことを言っただろうか？

『あ、ごめんなさい。何でもないので。ルームメイト希望の方ね。今からお時間あります？ 良かったら、部屋の見学を兼ねてこちらへいらつしやらない？』

「え、今からですか!？」

いくらなんでも唐突過ぎやしないだろうか。

『実はアタシ、明日からしばらく忙しくて。今日なら何とか都合がつきそうなんです』
そう言われたら仕方ない。

依子としても、あの仔猫をペットショップに迎えに行くために、一刻も早く部屋を決めたいところだったので、好都合と言えば好都合。

不都合といえば、今お腹が空いているということだけだ。

買ってきた野菜を横目に見て、依子は口をへの字に曲げつつも答えた。

「わかりました！ お伺いします！」

『ああ、良かった。ウチの場所はおわかり？』

「はい。実はすぐ近くに住んでいるんです」

すると電話の向こうの人物は、再び『ふふ』と笑った。何やらご機嫌のようだ。

『じゃあ、お待ちしてるわ。なるべく早く来てね』

そう締めくくられ、相手は通話を切った。

依子は買ってきたものを冷蔵庫に放り込むと、身分証明書として運転免許証と社員証、それにスマホと財布を鞆に入れ、再び外に出た。

夏の夕暮れ道を早足で歩く。辿り着いたのは、ビックリするほど瀟洒しょうしやなマンションだった。

——え？ 本当にごこ？

どう見ても家賃折半三万五千円とは思えない。

何かの間違いではないだろうか住所を確認するが、ここで正しいようだ。

入口のインターフォンで部屋番号を押すと、すぐに『ハイ』という応答があった。先ほどの電話と同じ、柔らかな低い声。

「あの、先ほどご連絡しました、中林です」

『ふふ。お待ちしてたわ、どうぞ』

そのままふつり、とインターフォンが切れ、依子は狐につままれたような気分でマン

ションの中に入った。場違いな所に怯ひるみつつ、エレベーターに乗って件の部屋くたんの前まで行き着いた。

——何かが、おかしい。

単純で思い込んだらまっしぐらに取り柄（？）の依子とはいえ、さすがに話が上手過ぎることに気がついた。

何か作偽さくご的なものを感じるの、決して気のせいではないはず。

ドアベルを鳴らすのをためらっていると、突然ガチャリとドアが開いた。

「いらつしやーい！」

「……あああああっ!!」

語尾にハートマークが付きそうな声を上げて依子を出迎えたのは、先日出会ったあのゴリ押しこねずみの美女だった。

* * *

「あらあ、残念。カワイイ男の子が釣ひれるかと思っただけなのに。チンチクリンの仔鼠こねずみが来ちゃったわねえ。ま、仕方ない。こっちも急を要しているから、アンタで我慢するわ」

玄関先で依子を見て美女がのたまった台詞がコレである。

——え、男がご希望ならそう書いとけよ！

なんで？ どうして？ という疑問をすつ飛ばして、依子は心の中で突っ込んだ。色々聞きたいことがあり過ぎて、何から訊ねていいのかわからない。

正直こんな得体の知れない美女を信用することはできない。この件は白紙に戻してもらおう。そう思つて断ろうとした時、リビングから「にゃ」と現れたその存在に、思わず目が釘づけになる。

「——あ、こ、この仔っ……!!」

そこにいたのは、ベットショップで依子が一目惚れをした仔猫だった。引つ越し騒動のきつかけとなつたあの仔猫。

「ど、どうしてこの仔が!？」

依子が混乱の坩堝の中で喘ぐように訊ねると、美女は「ふふふ」と含み笑いをしながら仔猫を抱き上げた。仔猫はすでに美女に慣れていて、彼女の手の中でゴロゴロと喉を鳴らしている。

「実はアタシもこの仔に一目惚れしちゃつてねえ。アンタには悪いと思つただけど、買わせてもらったの。ごめんねえ？」

——だからあの時、追い立てるようにあたしを家に帰したのか!!

あの時の美女の挙動不審っぷりが腑に落ちて、依子はスッキリすると同時にむかつ腹を立てた。

「酷い！ 飼いたいならそう言ってくれば良かったんです！ 何もあんな風に追い払うことないのに！」

依子が声を荒らげるも、美女はニコニコするばかりで悪びれた様子はない。

「悪かつたつてばあ。でもこうして一緒に住む訳だから、何にも問題ないでしょう？」

言われてみれば、確かにそうだ。

だがしかし。

「まだ住むなんて決めてませんよ、あたし！」
ルームシェアとはいえ条件に合う物件で、飼おうと思つていた当の仔猫までついてくるのだ。文句のつけようがない。

だが、唯々諸々と従うのはまったくもつて癪に障る。まるで依子が同居を認めたかのような、余裕綽々な態度が実に気に食わない。依子は憤慨してそう言ったが、美女は不思議そうに首を傾げる。

「何で？ アンタもこの仔を飼いたかつたんでしょ？」

「そ、それはそうだけど！」

「アタシもアンタのことはずっと気にかかったたのよー。横取りしちゃった訳だし。だから今回ルームメイトを探すことになって、アンタの顔が一番に頭に浮かんだの。そういえば携帯番号を交換してたんだったって気づいて、電話をかけようとした矢先だったのよ、アンタからかかってきたのは。ホラ、アンタ住む所探すって言ってたし」

と言いながら、美女がスリッパを出してくれる。

美女の話を聞いて、依子はかけた電話の番号がすでに登録してあったことからくくりがわかった。

それはともかく妙な縁だと思ふ。この人の掌てのひらの上で踊らされている気がするのに、憎めないのはなぜだろう？

依子は不思議に思いながら、出されたスリッパに足を通して家へ上がった。

「勢いでこの仔こを買っちゃったはいんだけど、アタシの仕事、出張が多くてねえ。いない間、放っておけないでしょう？ だからその間この仔の面倒を見てくれる同居人を探してたのよ」

美女は依子をリビングへ通すと、仔猫を抱かせ、自分はキッチンに入ってしまった。

食事を作っている最中だったのだろうか。食欲をそそる匂いが部屋中に漂っている。

怒りと困惑で忘れていた空腹感が急に甦よみがえってきて、依子はボスンとソファに座り込んだ。腕の中の仔猫は、喉をくすぐる依子の指にじゃれついて甘噛みをしてくる。仔猫と

いえど、小さな牙が生えていて何気に痛い。

「コラ、あたしの指は、アンタのご飯じゃないのよ？」

両手で仔猫を顔の高さまで持ち上げて、めつと睨んだ後、その小さな鼻にちゅつとキスをした。

次の瞬間、依子は手の中の仔猫を取り上げられた。気づくとソファの前のテーブルの上においしそうな料理が置かれている。

冬瓜とうもろこしと豚肉の煮物、オクラと塩昆布の和え物あ、ミョウガとささみのぬた、それに白いご飯。手の込んだ和食がホカホカと湯気を立てている。依子は思わずゴクリと唾を呑み込んだ。

ふと美女の方を見ると、彼女は仔猫の首根っこを摘まみ上げ、睨んでいた。

「ホントに困った猫ねエー」

何がだろう？ と訝ふかりつつも、依子は目の前に置かれたご馳走に目を奪われてしまう。

「あ、あの、コレ……」

「アンタのご飯よ。夕飯まだなんでしょう？ 食べなさい」

「え、い……いいんですか!？」

「どうぞどうぞー。アタシのお手製の料理をじっくり味わいなさい。さ、アンタはこっち」

美女はあつけらかんと言くと、小さな哺乳瓶で仔猫にミルクを飲ませ始めた。依子はそれを羨ましく思いながら、ありがたく食事を頂くことにした。哺乳瓶で飲ませるのは、今度やらせてもらおう。

——アレ？　なんでこの人、あたしが夕飯食べてないってわかったんだろう？

またもや疑問が生じたが、一口食べると、あまりの美味しさにその疑問はすっかり頭の隅に追いやられてしまった。

「美味しい!!　美味しいです!!　料理お上手なんですわねー、あなた！」

「でしよー？　ふふふ、たんとお上がんなさい」

どの料理も料亭顔負けで、依子はあつという間に平らげた。

手作りって本当だろうか？　こんなに美人でそのうえ料理もできるなんて、世の中不公平だ。

すっかり満腹になった依子は、うっとりとお腹を擦りながらソファの背にもたれた。

「ご馳走サマでしたあ……」

「ふふーん。良い食べっぷりねえ。餌付けのし甲斐があること」

美女が一人掛けのソファで、依子と同じくお腹が満ちて満足して眠った仔猫を撫でてやっている。

——餌付け……

仔猫のことだろう、たぶん。

「あの……その仔、名前は何ていうんですか？」

「ああ……まだ決めてないの。色々考えたんだけど決まらなくてね。アンタが決めていいわよ」

「ええ!?　そんな！　だって、あなたの猫なのに！」

依子が恐縮すると、美女は下唇を突き出していきなり腹を立て出した。

「ところで依子！　アンタ猫の名前を気にしてるけど、アタシの名前は知ってるんでしょうね!?　『あなた』『あなた』って！　まさかアタシの名前知らないなんて……」

「ええ!?　あ、す、すいません！　お、お名前を伺っていいですか!？」

——ちよ、この人めんどくさい!？」

「やっぱり知らなかったのね！　そんな気はしてたけど……。五嶋正栄よ！　携帯にも登録してあったし、貼り紙にも書いてあったでしょう!？」　まったくアンタの目は節穴ね！　同居人の名前くらい、ちゃんと覚えなさいよ！」

「は、はいいい!!」

いつの間にか同居することになっていたが、依子は思わず返事をしてしまった。まあ、人の名前を覚えるのは大事なことだ。

「しよ、しよえいさんですか。変わったお名前ですね……」

「正栄でいいわよ。ウチは全部『マサハル』って読める名前なのよ。マサハルって、父親の名前なんだけど。悪趣味よねえ。兄は真美まづみなんだから、ホント嫌になっちゃう」

ああ、お兄さんは男なのに女性ののような名前まづみで、正栄さんは女なのに男性ののような名前なんだな、と依子は思った。

「で？ この仔の名前はどするの？」

美女——もとい正栄は視線を落とし、自分の膝で眠る仔猫を指した。

「ええと、本当にあたしがつけていいんですか？」

「そう言ってるじゃない」

「……じゃあ……」

依子がつけた名前は、ブルー。

美しい灰色の毛並みは、光の加減によっては青色に見えるから。

「ふうん。いい名前じゃない。アタシの目の色と一緒ね」

何だか嬉しそうに言われ、依子は正栄の目が青色をしていることに気がついた。真夏の空のような青だ。

「正栄さん、外国人さんなんですか？」

「まぎれもない日本人よ！ ただ母はアメリカ人だけどね」

——ああ、なるほど。

この日本人離れた美貌は、異国の血が混ざっているからなのか。最近は純粹な日本人でも、顔の濃い人がいらっしやるので、あまり気にしなかったが、そう言われてみると、アングロサクソンの特徴が現れている。

「だからそんなに美しいんですね」

しみじみと言うと、正栄は右眉を上げて、ニヤリと口元を歪めた。

「……そう言われるのはあまり好きじゃなかったんだけど、不思議ね。アンタに言われるのは嬉しいわ」

その表情がやたら艶つやっぽく、依子は不覚にもドキリとしてしまった。

——一体どうしてっ……!!

女の人にドキドキしたことなんて、今まで一度もないのに。

「ねえ、依子。ここに住むでしょう？」

「……それは……まだ……」

「可愛いブルーもいて、アタシの美味しい手料理も食べられるのよ？」

豊みかけるように誘惑する低い声が、余計に依子を警戒させる。まるで魔女のようだったから。

「な、なんでそんなに、あたしをここに住ませたいんですか!？」

正栄が振りまく蟲惑こわくの鱗粉りんこなを振り払うように叫ぶと、フェロモンたっぷりの魔女は「あ

らん」と肩を上げた。
 「だって、アタシ明日から一週間出張だもの。アンタがここにいてくれないと、ブルーが飢え死にしちゃう」

ガクリ、と首を折りながらも、現実的な理由に依子は安堵した。

「そういうことは早く言ってくださいよ！」

「じゃあルームシェア、OKしてくれる？」

「仕方ありませんね、ブルーを死なせる訳にはいきませんから」

そう言った瞬間、物凄い力で抱きしめられた。

え!?! え!?!

女の人にしては広すぎる胸板は硬く熱く、アンブル・ナルギレの匂いがした。

——水煙草の、匂い。

「ありがとう、依子。——後悔はさせないから」

バリトンボイスが耳腔に忍び込んで、依子を甘く痺れさせた。

依子は反射的に耳を手で塞ぎ、真っ赤な顔で叫んだ。

「ちょ! 放してくださいよお!! 耳元で喋らないでっ!!」

——後悔させないから、だと!?

多大な不安を抱えたまま、こうして依子と正栄のルームシェア生活——またの名を

正栄による餌付け作戦——の幕が開けたのだった。

4 オカマ

「アタシがいない一週間の間に、ちゃんと荷物運び込んでおくのよ?」

そう身勝手に言い置いて、正栄は出張へと旅立った。

そんな訳で、依子は絶賛お引越中である。

と言っても引越し先は徒歩七分のご近所さん。ちまちまと私物を運び込んでおくと、ブルーの世話をして新しい住処で眠る、の繰り返しだ。

正栄が用意した依子用の部屋は、南向きの八畳の洋室。この部屋はもともと客間だったため、ベッドやサイドテーブルなどの家具がすでにあつた。さらに大きなウォークインクローゼットもあつたので、今まで使っていた自分の家具は、思い切つて処分することにした。

学生時代から使っている物ばかりで、家電を始め古くなっていたし、何より元彼との思い出が染みついてる気がしたからだ。これから新たな生活をするのだから、一掃す

るには良いタイミングのように思えた。会社の友人たちに譲れる物は譲り、残った物は業者を呼んで処分した。

がらんとした元我が家を感じ深く見回したものの、不思議と哀しくはなかった。これはたぶん、良いことなのだろう。

そんなこんなであつという間に一週間が経ち、依子は書類手続きも含めた引越しを終えた。ホツとしつつ、新たな城（共同ではあるが）となった家のリビングで、愛しの仔猫と一緒にソファで丸まっていた。

買って来た弁当を食べ終え、ブルーとじゃれ合っているうちに眠り込んでしまったらしい。玄関の扉が開く音で目が覚めた。

正栄が帰ってきたらしい。

眠い目を擦りながら身を起こすと、リビングのドアの前に知らないスーツ姿の男が立っていた。

眠気が一気に吹っ飛んだ。

「ただいま、依子」

「——キ」

「き？」

「キヤアアアアアアツ!!」

大絶叫だった。

涙目で叫ぶ依子に、スーツ姿の男は仰天したようで、慌てて依子の口を骨ばった大きな手で塞いだ。そのうえ胸の中に閉じ込めてくるので、依子は全力でその手から逃れようとした。

「イヤアアアアツ!! ヘンタイ! 変質者!! やめて、触んないでっ!! 警察!! 警察呼……ふん——ツ!!」

「落ち着け!! 落ち着いて、依子!! アタシよ、アタシ!! 正栄!!」

——口を塞がれて無理矢理抱きしめられて、落ち着けもへつたくれもあるもんか!! がなり立ててやろうとして、変質者の身体から漂う香りが、ごく最近嗅いだことのあるものと気づいた。甘くて、それでいて水煙草のような——アンブル・ナルギレ。

——正栄、さん!?

依子は目を見開く。スーツの男は大きくため息を吐いて手の力をゆるめた。

口を塞がれていた手を離された後も、依子は口を開けたまま、目の前の男を観察した。長い髪はすっきりと短く、しなやかな体軀にダークグレイの質のいいデザイナーズスーツが似合っている。どこからどう見ても男性の顔なのだが、それは依子の知る正栄のものだった。化粧をしていなくても、正栄の美貌は損なわれることはないらしい。

「しよ、正栄、さん!?!」

「正栄でいいって言ったでしょ」

——いやいや、そんなのどうでもいいでしょ!?

頭に来た依子は、思わず男の頭にチョップした。正栄は「イテ」と呻いたものの、悪戯がバレた子供のようにニヤニヤと笑っている。

「話の腰折んな!! 何で男の恰好してんのよ!!」

「だって男だもん」

「はあ!？」

「オ・ト・コ。女装してたのよ、依子ちゃん。アタシの下半身には生まれた時からチン……」

「みなまで言うなああボケエエエ!!」

美形の口から発射されんとした卑猥な言葉を阻止すべく、依子は間髪をいれずにその口を両手で塞いでやった。

——嘘だ。嘘だと信じたい。

だが目の前の男の喉仏が、真実であると物語っている。

眩暈がした。

全ての違和感が、これで解消された。

やけに低い声だと思ったんだ。

「騙したんだ!!」

声を荒らげた依子に、正栄は大袈裟に肩を上げてみせた。その仕草で正栄が確信犯だったのだとわかった。

「騙してなんか! いいい、依子。アタシは女装家なの。美しい女性の恰好をして外に出るのが大好き! あ、ちなみに歳は三十八ね。でもその姿で仕事はできないのが今の世の中よ。だから仕事に行く時は男の恰好をするけど、普段のアタシはアンタの知ってる女装家の正栄。どうーゆーあんだすたんー?」

美女は化粧を落とせば超絶美形のビジネスマンだった。男の癖に四十路前のオッサンの癖に、その肌のきめ細かさとか喧嘩売ってんのか! マジでけしからん! このアングロサクソンめ!!

正栄はわしわしと依子の頭を撫で、「さーて、コーヒーでも淹れますかねー!」とこの話を強制的に終わらせようとしている。

そうは問屋が卸すもんか!

コーヒーのいい香りが漂い始め、ソファの上でぶすつと体育座りをしている依子の前に、ロイヤルコペンハーゲンの皿に載った色とりどりのマカロンが差し出された。

「ハイ、これ。神戸のお土産よ。ここのマカロン、有名なんですって。テーブルに置いておくわね」

オカマは上着を脱いだらしい。薄いピンクのシャツを腕まくりしている。そこから伸

びた長い腕には綺麗に筋肉がついていた。それはまぎれもなく男の腕だ。ちくしょう！あの美女がこの残暑の中、長袖を着ていた理由がわかった！マカロンの隣にコーヒーの入ったカップ&ソーサーを置き、オカマは自分もコーヒーを持って、一人掛けソファに座る。

「出て行きます」

前置きなく依子は言った。

当たり前だ。

強引だったけど、女性だと思つたから同居してもいいと判断したのだ。恋人でもない男と一つ屋根の下、暮らしていける訳がない！！

静かに怒る依子とは対照的に、正栄はキョトンとした顔をして、長過ぎる足を組みながらコーヒーを啜つた。

「はあ？ 何で？ アタシがアンタみたいのを襲うとでも思つてんの？」

そう言われてしまえば、ぐうの音も出ない。正栄はオカマだ。つまりゲイなのだろう。そういえば言っていたではないか、『カワイイ男の子が釣れるかと思つて期待してたのに』と。女に興味のないオカマなら、下手に一人で住むよりよほど安心な気がしてきた。

何より、正栄は料理が上手い。あの板前さんも真つ青な料理を、必要のない警戒心を理由に頂かないのはもつたない。

そして今も依子の手にふにふにした肉球でじゃれつくブルーの存在。

こんな愛らしいものを、手放すことなんてできやしない。この一週間でブルーは依子に懐き、依子のつけた自分の名前も認識したらしい。「ブルー」と呼びかけると、嬉しそうに駆け寄ってくるのだ。

自分の意地と素敵ライフを天秤にかけてグルグルと考えている依子に、正栄はにっこりと微笑んだ。

「依子、このマカロン美味しいわよ」

そう言うと、自分の食べかけの黄色のマカロンを、依子の口に押し込んだ。

「ん、む！」

「美味しいでしょ？ 出張はしんどいけど、こうやって現地の美味しいものを買って来て食べられるのは、ちよつといいわよねえ。次は京都よお。今度は和^わ三^{さん}盆^{ぼん}のロールケーキを買ってくるから、楽しみにしててねえ？」

「……………(和三盆……………)」

ぐぬぬう、としかめっ面をするものの、依子がすでに陥落しているのは丸わかりらしい。正栄は「ふふふ」と例の含み笑いをして、満足そうにしている。

——ちくしょう……

口の中のマカロンはホロホロと解^{ほど}け、なめらかに溶けていく。

黄色のマカロンは、レモンの味がした。

以後、依子の中でレモン味はファーストキスの味ではなく、オカマの味になった。

『オカマの味』

改めてその字面を頭に思い浮かべ、微妙な卑猥さを感じたことは、乙女の名にかけて墓まで持っていくつもりだ。

5 日曜日の洗濯

洗濯機の前で、依子は唸っていた。

一人暮らしのオカマが使っていた洗濯機は、ドラム式の最新型。しかも大型だ。その洗濯機で一日分の自分の洗濯物を洗うには、あまりに量が少な過ぎる。だから依子は数日間洗濯をせず、自分の部屋に籠を置いて、そこに洗濯物を溜め込んでいた。自分の家では、洗濯物を入れるその籠は洗濯機の隣に置いていたのだが、さすがに正菜に自分の汚れ物を見せるのは気が引けた。

まあ詰まるところ、今依子は溜まった洗濯をしようと、洗濯機の前に行って来たのだが、そこに先客がいたという訳だ。

この家には家主と同居人である自分、そして仔猫しかいないので、当然のことながら先客とはオカマその人である。

今日も麗しいオカマは、ウィッグの巻き毛を揺らしながらこちらを振り向き、にっこりと微笑んで手を差し出した。

「あら依子。洗濯物ね？ ついでにやっちゃうから、ホラ籠、貸しなさい」

——なんですと!?

依子は呆気にとられて正菜の顔を凝視し、それから目の前に差し出された大きな手を振り払った。

「——ちょ!! 何っ!? ムリムリムリッ!!」

正菜が言わんとしていること——つまり、依子の分の洗濯物を、自分のものと一緒に洗ってあげるといふ彼の台詞の意味を理解して、依子は思いっきり拒絶反応を示してしまった。

——洗う? あたしの洗濯物を? 正菜のと一緒に!?

それはとんでもなく親密な行為に思えて、依子は顔を真っ赤に染めた。

何しろ、十数年間、母と娘の女だけで暮らしていたのだ。男性の洗濯物が自分の下着と一緒にドラムの中で回っているところなんか、想像すらできない。

——だって、それってまるで……

恋人同士みたいだ。

そこまで考えて、依子は慌てて頭を振ってその考えを打ち消した。

——な、何考えてるのっ!! コレはおカマ!! おカマの正栄!!

「なあに妄想してんのよう? アンタのパンツくらい見たところでムラムラしたりしないから、安心しなさいよお? ちなみにアタシはパンツより中身だから」

「なっ!! バッ!!」

頭の中を見たかのように正確に言い当てられて、依子は更に頬を染めて憤慨する。だが正栄はカラカラと豪快に笑うばかりだ。

「大体、別々に洗うなんて水道代がもったいないじゃない。いいからよこしなさい」

「……うっ」

水道代、と言われてしまえば、依子に返す言葉はない。なぜなら、正栄は家賃以外のお金を受け取ろうとしないのだ。

『アタシが一人で生活してる時とほとんど変わんないし、アンタにはブルーの世話を全部押しつけちゃってるからねえ』

正栄はアッサリとそう言うが、人一人分の光熱費が加算されているのに変わらないはずがない。ブルーの世話だって、もともと正栄はそれを目的に同居人を探していたのだから、依子がやるのは当然だ。しかも正栄は食事も掃除も依子以上にしているのに。

差し出された正栄の手に洗濯物の籠をウツカリ渡しそうになったところで、依子は正気に戻る。

「——っ!! イヤイヤイヤ!! そうじゃないからっ!!」

「ハイハイ。もうめんどくさいわねえ。いいからさっさと渡しなさいよ」

「だめええええ!! せ、せめて下着だけは!! 下着は自分で手洗するからああ!!」

ぐい、とアッサリと籠を奪い取られ、依子は半泣きで正栄の腰にしがみついた。

「ちくしょう、こんな時ばっか男力を発揮しおって、このおカマ!!」

「……………むしろもつと出させてくれると嬉しいんだけど」

「は?」

「何でもなあい。まあ、下着は手洗いってのは女子の基本よね。いいわ。下着だけは許してあげる」

籠が無事、手元に戻ってくると、依子はくるりと後ろを向いて、その中からゴソゴソと下着だけを取り出す。すると背後から伸びてきた長い腕が、ヒョイ、と依子の手の中の下着を奪った。

「——え……」

「ちよつとアンタ! 何この色気皆無の下着は!!」

ギョツとして振り返れば、依子のブラジャーを摘まみ上げて洪面を作っている美しい

オカマがいた。

その優雅な指にひつかかっているのは、依子のくたびれたブラジャー。何年前に買ったかもわからない程、年季の入ったボロボロのそれは、元はピンク色だったのだが、もはやその面影は残っていない。しかも所々ほつれた糸が布地から飛び出ている。

「ギャアアアア!! 何を勝手に触ってんのよおお!! ありえん!! 酷い何このセクハラオカマ!! 逮捕して逮捕——!! おまわりさああん!!」

「性別詐称でアンタが逮捕されなさいよ、この似非女子が!! こんなワイヤーの捻じ曲がったブラ着けてよく平気でいられるわねっ!! 痛くないの!?!」

「え……そういえば痛いような……」

「バカじゃないの、この小娘!! ちよつと見せてごらんなさいっ!!」

血相変えたオカマはそう叫ぶなり、ペロン、と依子が着ているカットソーを捲り上げた。休日の午前中。まだルームウェアのままだった依子は、捲り上げられたその下には何も身に着けておらず……当然ポロンと丸出しになったのは、二つの膨らみで——

「あら……失礼」

動揺を通り越して反応すらできずにいる依子を尻目に、オカマは礼儀正しく謝罪した。しかし言葉とは裏腹に、上げたカットソーを元に戻そうともせず、依子の胸をマジマジと観察している。

「ふむ。小振りだけど、形は抜群ね」

なぜか満足げな笑みを見せて、オカマは捲り上げたカットソーを下ろす。

依子は顔が真っ赤になるのを感じつつ、とりあえず目の前の美しいアングロサクソンに渾身の正拳突きを食らわせたのだった。

* * *

ソファを陣取って身体をダルマのように丸めている依子に、ブルーがみゃあ、と鳴いてすり寄ってくる。いつもは近寄っていくだけで飛びつくように構ってくれる飼い主が、今日はちっとも相手をしてくれないのが不満らしい。じゃれつくように依子の腕を引っ掻いたり甘噛みしたりしてみても、一向に反応がないので、諦めたのかよそに行ってしまう。

「よーりこちゃーん。スコーンが焼けたけど?」

さきほどから漂っていた香ばしい匂いは、スコーンだったのか。そう思いながらも、キッチンからかけられた声に、依子はあえて返事をしない。

「まあだ怒ってるのオ?」

怒っているに決まっている。

服を捲り上げられて、生乳を見られたのだ。これが怒らないでいられるか!!
ふんっ!! とそっぽを向いて無視を決め込んでやれば、正栄はしばし沈黙した。

——反省するがいい、セクハラオカマめ!!

だがしかし、オカマは頭脳戦に強かった。そして反省もしていなかった。

「今日はブレーンのやつと、ラム酒に漬けたレーズンとオレンジピールを入れたのを焼いたのよ?」

ガチャッと音がして、部屋に漂っていた芳しい匂いがより濃密になる。見えないが、恐らく正栄がスコーンを焼いていたオーブンを開けたのだらう。

「……ぬ……!!」

口の中に唾が湧いて出た。

お腹? もちろん空いている。もうすぐ十一時になろうとしているが、先ほどの騒動で依子はすっかり朝食を食べる機会を逃してしまっていた。

「もちろんクロテッドクリームもあるわよ? 紅茶はディンブラで淹れたロイヤルミルクティー」

カチャリカチャリと食器がダイニングテーブルにセットされていく音と、コポコポ、という水音が聞こえる。コクのあるディンブラの香りが鼻腔をくすぐった。

——く、くそっ……!!

「あとハーブの入ったソーセージも焼いたの。依子が前に美味しいって言ってたやつよ」

——ええ!? 小岩井の牧場からお取り寄せしたというあのソーセージか!!

以前正栄がどこからもらってきたそのソーセージは、ハーブとレモンの絶妙な味が実に爽やかな極上の一品だった。あの肉汁を思い出し、ごくりと喉が鳴ってしまった。

「ミニトマトとパプリカのマリネもあるわ。さあ、ブランチしましょ?」
ぐううううう。

依子のお腹の虫が盛大に鳴いた。

「ぶっ……!!」

正栄がテーブルに突っ伏す音がした。間違いなく笑っている。

依子はすつくと立ち上がり、ダイニングテーブルまで行くと、正栄のウィッグを掴んで引っぺがした。大きな幾何学模様のスカーフを、ヘアバンドのように結んでいたけれど、それも丸ごと取ってやった。

「あっ!! ちょ!! ウィッグ取らないでよっ!! 恥ずかしいじゃないっ!!」

「何が恥ずかしいだ、このオカマ!!」

完璧な化粧を施した顔をガバツと上げて、正栄が叫ぶ。依子にウィッグを奪われた正栄は地毛の短髪をさらけ出している。しかしおかしはずのそれも、無駄に美し過ぎるこの顔立ちのせいで、スーパーモデルのベリーショートヘアにしか見えないから、世の

中全くもって理不尽だ。

「ツラが何よっ!! あたしはっ!! あたしなんか、おっぱい見られたんだからねっ!!」
涙目で訴える依子に、正栄は一瞬目を見開いたかと思うと、ふ、と口元をゆるませた。
そしてえも言われぬ艶を滲ませて、低く甘く囁く。

「可愛かったわよ?」

ボンツと顔が真っ赤に染まるのが、自分でもわかった。

へたり込むように椅子に座ると、先ほど正栄がやっていたのと同じように突っ伏した。

——もうヤダホント、このオカマ。

心臓がバクバクする。

いや、この色気ダダ漏れなオカマを目の前にすれば、どんな人間でも動揺してしまうに違いない。

同居人は、オカマ。

けれどフェロモン過多。

って、何ソレ。何かの罫?

——やっぱりこの同居生活、考え直した方が良いんじゃないかな!?

頭を抱えながらも、

「ホラ、依子。あーん」

立ち読みサンプルはここまで

と甘い声に顔を上げれば、オカマがプチトマトを刺したフォークを差し出している。

その様子は実にご機嫌。

ジト目を向けながらも、口を開いてそれを受け入れてしまうのは、そんなオカマが憎めないからだろうか。

口の中に広がった、トマトの甘みとバルサミコ酢の風味に、ふにやりと頬がゆるむ。

「オイシイ?」

オカマが小首を傾げて聞くので、依子はこっくりと頷く。

そしてそんな自分の態度に本当に嬉しそうに笑うオカマ。

おかしなことをうやむやに甘く包んで、奇妙な同居生活はこうして続いていくのだった。

6 芽吹く

十月の終わり。

正栄との同居を始めてひと月が過ぎ、新しい生活にも慣れた頃、その辞令は突然下った。

「中林君。君、来月から営業部に異動だ」